

第16回 弘前大学FDワークショップ報告

「テーマ：学生のアクティブ・ラーニングを評価し、彼らの学習成果の測定に用いる」

日時：平成25年12月4日（水）13：00～18：00

場所：弘前大学創立50周年記念会館岩木ホール

全体総括

アクティブ・ラーニング導入にあたり、ルーブリックの活用による学生レポートの評価に実用的な手法を学ぶ機会があった。教員毎、学部毎に特徴的なアクティブ・ラーニングが行われており、その交流を得たことは非常に有意義であった。今後、それぞれの学部が他学部から導入できる点を総括し、それぞれの方法での講義の評価を適切に行うことが求められてこよう。

ワークショップでは新任教員や今後、専門教育を持つことになる教員も参加しており、年配の教員が開発した講義テクニックを吸収することができた。今後、教員の参加枠を次第に広げること、参加した教員が学部内での教育要領の改善としてのFDの核になることが期待される。

【概要】

テーマ

「学生のアクティブ・ラーニングを評価し、彼らの学習成果の測定に用いる」

参加者

各学部等から推薦された教員、及び宇都宮大学、福島大学、青森県立保健大学、青森中央短期大学、仙台青葉学院短期大学から申込のあった教職員等、約70名であった。

開会挨拶

中根明夫理事（教育担当）より開会の挨拶があり、本学にアクティブ・ラーニングを導入する意図について、説明がなされた。

基調講演

京都大学からお招きした松下佳代教授に「学習成果の評価の方法ーパフォーマンス評価を中心にー」と題して講演いただいた。

模擬講義

アクティブ・ラーニングを自らの講義に導入している医学研究科の鬼島宏教授と教育学部の小嶋英夫教授に、それぞれ参加可能な学生を伴って、講義の一部を公開してもらった。参加教員は、これらの事例を通して、アクティブ・ラーニングの導入方法を検討することとした。

グループ討議

各グループではメンターの司会により、各講義のシラバスの検討事項について確認し、ペアワークにて今後の改善点を明らかにすることとした。その検討事項をグループ内にて議論し、他のグループに対して発表してもらうこととした。

討議内容発表

各グループでの議論の成果は、以下の「各グループ毎の総括」に記載

総合討論

どのように活発に講義に参加させるかについて、学生側への働きかけなどの質疑がなされた。そして成績評価に反映させる枠組みを提示するなど、学生側に参加する動機付けさせる例が挙げられた。

閉会挨拶

教育推進会議 FD ワーキング・グループ長の石川隆二教授より

各グループ毎の総括

○グループ討議「パフォーマンス評価を取り入れてみる」討議結果

【人文学部】

講義形式の授業にアクティブ・ラーニングの手法を取り入れることを検討し、パフォーマンスを評価するという観点から、授業シラバスの見直しを行った。

『福祉経済学』

【目 標】 ①変化する実態を自ら調べて共有し、社会保障制度の実態を理解する。
②検索した情報のみを活用するのではなく、自分でデータを収集し、整理・分析する能力を身に付ける。

【授業方法】 グループワーク、資料の収集・整理・分析、プレゼンテーションに基づく授業。

【成績評価】 学生全員と教員が評価シートに基づき、プレゼンテーションの評価を行う。

【討議結果】 ①授業全体の評価をどのようにすべきか、見直す必要がある。
②プロジェクト（課題）単位でのグループワークが行われているが、基礎知識の講義・グループでの活動・評価をどのようにすべきか、授業計画を見直す必要がある。



【教育学部】

グループ討議では、アクティブ・ラーニングの授業展開のポイントや、ねらいとする学習効果とその評価方法について、以下のような議論がなされた。

- ・協働学習を用いたアクティブ・ラーニングでは、個別学習（事前学習）と協働学習を如何に連携させた授業が実施できるかがポイントであること。
- ・アクティブ・ラーニングの学習効果を考える時、学生達が明確な理論的背景に基づいた実践・リサーチを考案することができるかどうか重点をおくこと。
- ・アクティブ・ラーニングの評価という点では、毎時間提出されるレポートによるポートフォリオ評価の実施や、グループワーク、全体討議そして研究発表等の観察評価が有効であること。



【医学研究科】

医学研究科では日常的に行われている講義の一環を模擬講義として実践した。講義の内容を適格に把握して、それを3分で発表することは理解を促すことにつながる。また、その内容を他者が聞き、質問事項により内容を深めていた。このような実践を今後もつづけていくためには講義の補助としてTAなどの活用もますます重要になるであろう。

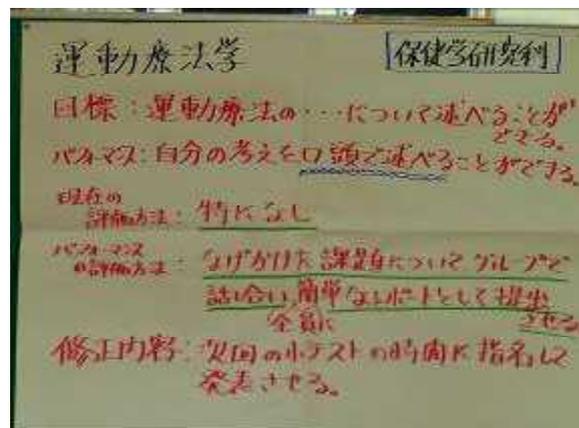
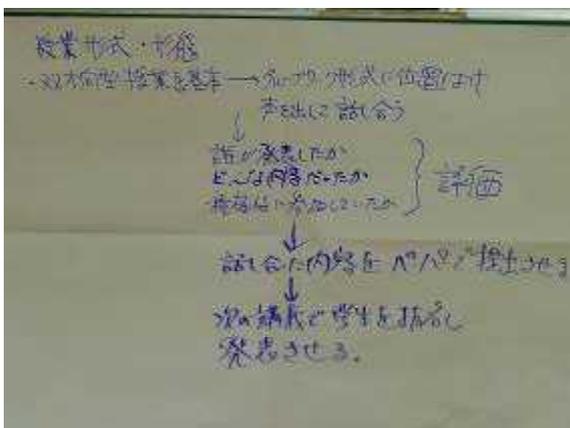


【保健学研究科】

保健学研究科における学部学生の教育は、看護師をはじめとする医療従事者の養成が重要なミッションであるため、必然的に実習や演習、あるいはこれらと密にリンクした講義を主体としたカリキュラムが組まれており、ある意味ではすでにアクティブ・ラーニングが実践されていると理解していました。この度のFDワークショップでは、座学による講義形式の授業の時間内においても、できるだけこれを取り入れる方向での工夫が求められました。保健学研究科からは、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士および作業療法士の養成に携わるそれぞれの教員が参加しましたので、各教員には担当している代表的な講義シラバスをもとにアクティブ・ラーニングの導入について考えていただき、その中から互選により理学療法学専攻の「運動療法学」を取り上げ、グループとして検討しました。

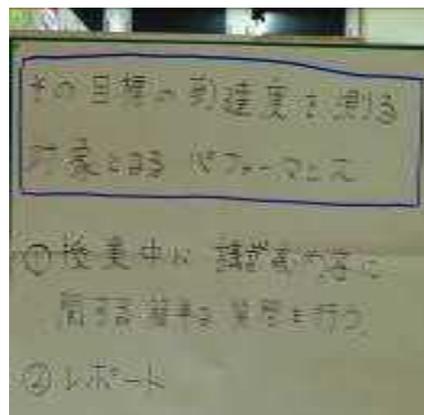
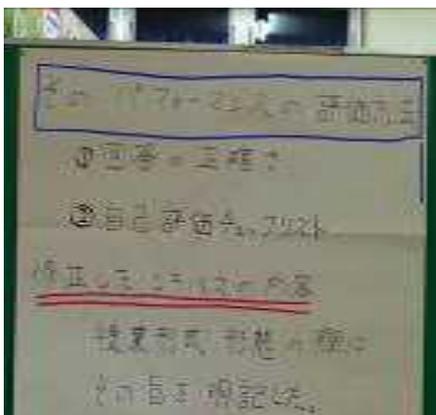
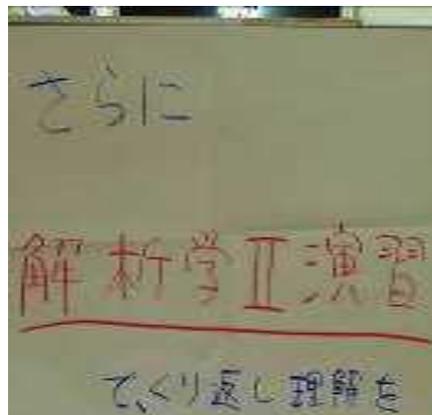
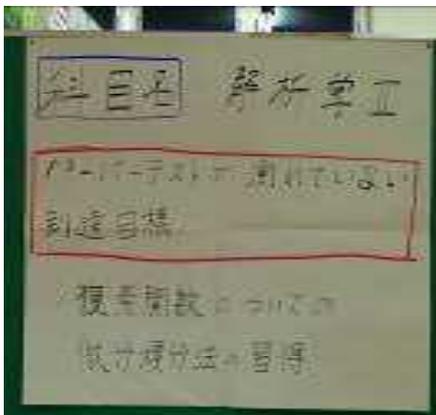
この授業は、臨地・臨床実習を見据え、学生が人前で考えを述べる態度を養うことも重視しており、教員から学生への問いかけを多用したり、小グループで知識や考えを述べ合う機会を設けていました。そこで、どのような方法でアクティブ・ラーニングを導入するか、そして学生のどのようなパフォーマンスを評価するかについて短時間の中で議論しました。その結果、少人数のグループ毎に与えた課題に対して「学生が考えて、それを口頭で述べること」を評価することとしました。すなわち、グループワークの中で声を出して話し合っているか、話しあっている内容は適切か、話し合いに参加しているか、の3点を評価項目としました。授業の最後に、話し合った内容について簡単なレポートとして個々に提出させ、これも評価しますが、次の授業時間では毎回行っている小テストの時間にランダムに学生を指名して、短い時間で前回の話し合いの内容を発表させることにしました。

また、学生のパフォーマンスの評価基準については、京都大学・松下先生が紹介されたルーブリックについて興味深く拝聴しました。各教員がルーブリックの開発に取り組み、これを取り入れる方向について検討することも直接評価の上で重要であると感じました。さらに、医学領域におけるアクティブ・ラーニングの実例としてご紹介いただいた医学研究科・鬼島教授の取り組みは非常に参考になりました。



【理工学研究科】

理工学部で実施されている基礎学力を重視した専門基礎教育プログラムにおいては、主要な専門基礎科目には演習・実習の時間が設けられ、TA制度の充実と共にアクティブ・ラーニングのための枠組みが作り上げられている。今回のグループ討議では、担当科目として、演習・実習系の科目を取り上げた参加者が多かった。その中から講義科目と演習科目とを巧みに連携して実施している数理科学科開講の「解析学 II」について、パフォーマンス評価を取り入れるための議論を行った。その過程で、当該科目の中で行われている「講義内容に関する簡単な設問、回答の正確さを基にした評価」が、パフォーマンス評価の内容を含むものと考えられた。また、他の実習系の科目において取り入れられている「自己評価チェックリスト」の作成も評価の判断材料として有用なものになると考えられた。



【農学生命科学部】

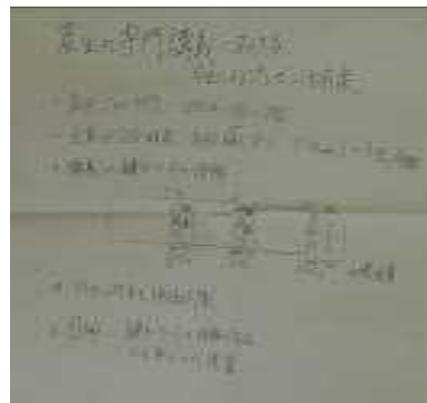
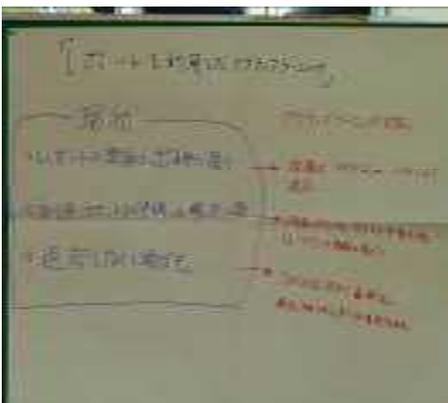
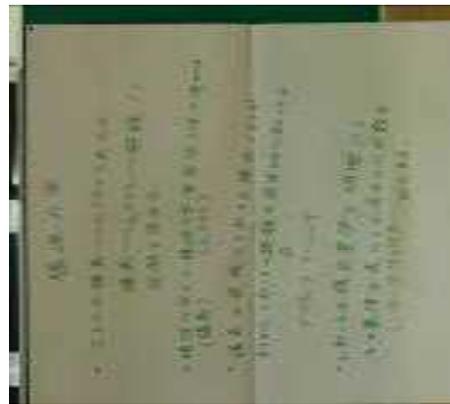
他学部と比較して特色の異なる学部としての導入事例を検討したことを発表した。

参考事例として

キーワード入りの質問用紙を講義前に配布，講義の間にその重要なポイントに注意して，講義に能動的に参加すること。

5回ごと程度に，クラスの1/3に提示しておいた重要事項について一人2分程度で他学生に説明してもらう。などの事例を通して理解度を深めることを想定した。

これらは，学科内において異なる研究室に3名ずつ配属される場合においても，学科に所属する全学生にとって各講義の最低重要事項を能動的に理解することを前提とした。発表準備の議論においては，アクティブ・ラーニングには質問用紙を配布することから含まれること，より能動的に講義に参加するためにはより濃密な講義参加準備を求めることもあるという事例が提示された。



【基礎ゼミ担当】

基礎ゼミの評価に関し、受講者の発言の多寡の差が大きい、個人での作業とグループでの作業を組み合わせている、出席状況を重視している、授業時の活動状況を教員の主観で判断せざるを得ない、情報収集・分析能力、文章作成・発表・討論能力はレポートやプレゼンテーションで評価できるが、自主的な学習態度やコミュニケーション、学生生活に関する知識習得は評価しづらいなどの意見が出された。その後、発言状況について発言の質や背後にあるものを総合的に判断することが重要だが、この評価には教員の主観が入り込む、あるいは基礎ゼミに遅刻なく出席できることで学生生活の知識を有していることが判断できるが、欠席しがちで学生生活への適応に問題がある学生については、クラス担任・保護者・保健管理センターとの連携が重要など意見交換した。

